

---

# 独り

叶星

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

独り

### 【Zマーク】

N3155F

### 【作者名】

叶星

### 【あらすじ】

庵が任務から帰ってきたとき、それは庵の死すときだった。庵を失つた瑛は独りぼっちで戦場を駆ける。

必死に手を伸ばした。

届いて欲しかつたはずなのに。

届かない。

あと一歩なのに。

貴方に触れられない。

「庵<sup>あん</sup>ツ！」

今は時間が嫌に緩やかに感じた。

酷く真っ白で、白か黒しか分からぬ。

まるでモノクロの世界にはまつてしまつたんではないかと想つた。  
精一杯伸ばした手は、服を掠つただけで、身体には触れられなかつた。

た。

そして、地面に崩れ落ちた。

庵は酷く息苦しそうに、だがそれでも笑つた。

「瑛<sup>えい</sup>・・泣かないで・・任務・・だつ・・たから・・ね？」

庵は任務から帰つてきたばかりだ。

瑛はただ、庵の帰りを待つていたのだ。

自然に、涙は堰を切つたようにぼろぼろと零れだした。

「『じめつ・・すぐ・・止まる・・つ・からつ』

庵の大きな手は瑛が一番大好きなものだつた。  
その手が瑛を撫でている。

瑛は、必死で涙を止めようとしたが叶わなかつた。  
逆にあふれ出してしまつ。

「泣き・・虫・・だね・・瑛・・は・・・」

庵はくすつと苦笑していた。

それでも構わなかつた。

しかし、庵は少しずつ衰えて、酷く冷たくなつていいく。

瑛は怖かつた。

「瑛・・・」

「何？庵」

「私が死んだ後、瑛・・・宜しくね？・・・」

「庵？・・庵？」

庵はとても安らかに目を閉じ、死んでいた。  
手は酷く冷たい。

何とも言いがたい絶望や哀しみばかりが頭を過ぎる。  
涙は出なかつた。

止まつてしまつた。

無言で、頬を拭い、笑つた。

「お休み・・・庵・・・・・」

ただ虚ろな田は、庵を映してから、庵の身体をその場所に埋めた。

瑛は走る。

獸の如く、前を見据えて。

瑛は斬る。

庵の残した大切なものを抱えながら。

だが、その背中は孤独だった。

たつた独り。

戦場にただ独り。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3155f/>

---

独り

2011年1月26日11時01分発行